

『続の原』

不卜の第三撰集。貞享五年（一六八八）序刊。半紙本二冊。上巻は句合、下巻は歌仙と諸家発句。句合は、春・夏・冬が二番、秋が一、一番の計四七番。判者は、春・素堂、夏・調和、秋・湖春、冬・桃青（芭蕉）が担当。今回とりあげる芭蕉の判詞は、貞享四年の冬に書かれたものである。

本文

一番

左 持 落葉

落つかぬ木の葉にあたる霽哉

風水

右

落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ

松濤

左りの句、景気微細に心を付たり。

右又、山もあらはなるふじの詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中、目に見えたる切字なし。五文字にて

云残したれば、きれ字をくはへて見るべきにや。なを分明ならざる

を難じて持に定侍るべきか。

現代語訳

左 持（引き分け） 落葉

はらはらと散って落ち着かない様の木ノ葉。その落葉に梢から落ちる霽があたる音が聞える。

* 木の葉は、枝についている状態では雑（『俳諧御傘』など）。「落葉」という季題で読まれているので、散っている様であることがわかるが、散りゆく様であるとも、散り落ちてかさかさど動く様であるとも、どちらともとれる。

右

木々は葉を落とし、遠くまで見渡せるようになった。遙か向こうの富士の続きに寺院の塔が一つ見え、それぞれに高さを際立たせている。

* 「塔」はお寺の塔。漢詩題ともなっている（『円機活法』）。高さをイメージして詠まれることが多い。

(判詞)

左の句は景色の美しさのごく細部に目をとめて詠んでいる。右もまた、和歌にもいう「山もあらは」な様の富士の美しい眺めを詠み、句の品格もゆったりとのびのびしていると感じられる。けれども、句の中にはつきりとした切字がない。(上の(五文字で)とて「とうふうに(言い残したので、ここに切字を加えて)＝切れがあると考えて(読むべきだろうか。やはりはつきりしないという点に難があるので、引き分けとするべきである)うか。

* 「微細」「分明」は、『日葡辞書』『書言字考節用集』などにあって、「ミサイ」「フンミヨウ」と読む。

「山もあらは」は、『新古今集』の「冬のきて山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峰にさびしき」をふまえた表現であるが、歌が山の木々が葉を落とした様であるのに対し、句は近景の木々が葉を落として、遠景の富士や塔がよく見える様を詠んでおり、意味を転じて用いている。

また、切字そのものの有無について問題になっているともとれるが、各目の「切字」の有無にこだわらない芭蕉の切字観はよく知られている。既に貞享二年に、「辛崎の松は花より靡にて」「の吟が芭蕉にあり、(こ)も」「切字」「とは言っているものの、」「切れ」について問題になっていると考えた方がよいように思う。

なお、右の解釈では切れを上五にあるとして訳したが、中七にあるとする意見もあった。傾聴すべきと思われるが、とりあえずこのままでおく。